

日本人高齢者におけるサクセスフル・エイジングの構造と機能に関する検討

著者	田中 真理
内容記述	筑波大学博士（心理学）学位論文・平成23年3月25日授与（甲第5863号）
発行年	2011
URL	http://hdl.handle.net/2241/114411

氏 名 (本籍)	田 ^た 中 ^{なか} 真 ^ま 理 ^り (福岡県)			
学 位 の 種 類	博 士 (心 理 学)			
学 位 記 番 号	博 甲 第 5863 号			
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科			
学 位 論 文 題 目	日本人高齢者におけるサクセスフル・エイジングの構造と機能に関する検討			
主	査	筑波大学教授	博士 (心理学)	大 川 一 郎
副	査	筑波大学教授	博士 (心理学)	濱 口 佳 和
副	査	筑波大学准教授	博士 (保健学)	橋 爪 祐 実
副	査	東京成徳大学教授	教育学博士	新 井 邦二郎

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

先行研究における問題点として、研究者と高齢者自身のサクセスフル・エイジングの定義の不一致、サンプリングの問題、高齢者によるサクセスフル・エイジングの定義の多様性と高齢者の独自の定義に関する知見の少なさという 3 点があげられた。そこで本論文では、(1) 施設入居高齢者や要介護者といった在宅高齢者以外の対象者を含めた日本人高齢者におけるサクセスフル・エイジングの実態調査を行い、(2) 高齢者のサクセスフル・エイジングの構造を明らかにした上で、(3) サクセスフル・エイジングとして出てきた各側面が心理的適応にどのような機能を果たし、どのように適応や well-being に寄与するのかについて量的に検討を行うこと、の 3 点を目的とした。

(対象と方法)

方法は、研究の目的に応じ面接法と質問紙法を採用した。対象は 65 歳以上の在宅高齢者および施設入居高齢者である。研究 1 では、在宅高齢者に加え、軽費老人ホーム、特別養護老人ホームといった施設に入居している高齢者を対象として面接調査をおこなった。研究 2～研究 7 では、在宅高齢者および施設入居高齢者を対象とした。

(結果)

研究 1～研究 2 では、サクセスフル・エイジングの構造には、「アクティブ」と「平穏無事」という 2 つの大きな側面が存在することが明らかとなった。さらに、「平穏無事」は従来のサクセスフル・エイジングとは異なる、新たなサクセスフル・エイジングの側面であることが明らかとなった。研究 3～研究 7 では、「アクティブ」と「平穏無事」というサクセスフル・エイジングの 2 つの枠組みから、その諸側面と機能的側面および適応への影響について検討を行った。主な結果としては、①全体としては「アクティブ」のうちの人生や生活に対する積極的態度が、適応全般にポジティブな影響をもたらすこと、②新規概念である「平穏無事」は、ストレスフルな刺激や状況に予防的・内的に対処し、対外的な葛藤を回避する機能を持つこと、③在宅高齢者が人生や対人関係に対する積極的な態度、さらにストレスフルな状況への意識的な対処によって、

適応や心理的 well-being が促進される一方、施設入居高齢者は積極的な態度だけではなく、現状を肯定する態度や対外的な葛藤を回避することによっても適応や心理的 well-being が促進されること、が示された。

(考察)

以上の結果から、日本人高齢者が捉えるサクセスフル・エイジングには、従来の概念規定にはない新しい「平穏無事」という側面があることが示され、特に現状に抗わずにありのまま受け入れようとする態度は、加齢による喪失や制約を経験した高齢者の well-being において、よりポジティブに機能することが示唆された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、日本人がとらえるサクセスフル・エイジングについて、これまで自立した在宅高齢者が中心であった対象に、在宅サービスや施設を利用している虚弱高齢者を加えた点、また、質的データ、量的データの両面からその構造と機能について検討をおこなっている点で、まず、評価できる。

本研究において、日本人高齢者のサクセスフル・エイジングは、「アクティブ」「平穏無事」という2側面から構成されること、「アクティブ」は、適応や well-being に全般的にポジティブな影響を与えること、「平穏無事」は、対外的、内的ストレスや葛藤を予防・回避する機能を持つこと等が実証され、高齢者の適応に関する研究に新たな知見を加えることになった。

本研究の高齢者研究における貢献として、サクセスフル・エイジングの適応対象を拡張させ、年齢や疾病の有無、という基準ではなく、社会的制約という基準から老年期の適応をとらえ直すという視点が新たに提供されたこと、また、「平穏無事」というこれまでの研究において見られなかった新たな概念が提唱されたことの二つがあげられる。特に、「平穏無事」という概念はこれまで研究の少ない後期高齢者の適応を考察する際の重要な概念となりうる可能性があり、本概念の発見は本研究の大きな成果である。

ただ、研究対象者が質的研究では、「年齢」と「自立度（居住環境・要介護）」を軸としたサンプリングにとどまっている点、量的研究では実施可能な高齢者という調査上の限界があり、調査対象者の制約により本研究の知見の一般化には限界がある。また、サクセスフル・エイジングのプロセス面の検討については、本研究では十分になされておらず、グランデッド・セオリー・アプローチなどを用いた検討が、今後期待されるところである。

以上のことから、本研究は博士論文として十分な水準に達するとともに、十分な学術的価値を有するものと判断できる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。